

柳 順子さんに初めて会ったのは、●●●●年だったと思う。私が東京芸術大学で工芸史のゼミを担当していたときに、研究室に訪ねて来られた。柳さんは、茶入を納める「仕覆」を制作する作家である。いうまでもなく、茶入は手の平に載るほどの大きさの陶器製抹茶容器であり、それを覆う付属品である仕覆は古くは単に「袋」と呼ばれ、室町・桃山時代から茶入本体と同様に鑑賞され、中国製のいわゆる「名物裂」に高い関心が注がれてきた。

話を聞くと、仕覆の歴史背景を研究したいという。それには、茶入ばかりでなく茶の湯道具全般を知りたいという。それも、「使い手」側の茶人の立場ではなく、道具を「作り手」の立場から考えてみたい、と。柳さんが仕覆の歴史背景を調べてみたいという契機は、桃山時代の名物記『山上宗二記』（1588 年）に「つくも茄子」の代々の所有者や来歴が述べられており、そこに「京の袋屋」が一時所持していたという記事があることに強く魅せられたからという。現在、大学の美術史では工芸史を扱う講座は少ないし、ましてや茶道史を取り上げる授業はないといってもよいだろう。その頃のゼミは、芸大美術館にある工芸の現物を使って「ものの見方」や「作品を言葉で説明する（ディスクリプション）」の基本を学ぶのを目的としていたので、柳さんの研究には直接役立たないことを承知のうえでゼミの聴講生になって頂いた。

茶の湯の古文献では「京の袋屋」以外には、この生業の記事はほとんどないことを柳さんには伝えた。管見の限りでは、16 世紀中頃の『清玩名物記』に登場する大壺「三ヶ月」の所有者「袋屋五郎左右衛門」や 16 世紀末期の『松屋会記』にある奈良の「袋縫善五郎」ぐらいしかない。柳さんは、むろん、袋屋追究の難しさは覚悟していた。今から思えば、柳さんの興味は、高価な名物道具を所持することが出来る当時の「袋屋」という社会的な存在、強いては、布帛を扱う職業の歴史上の地位を自分の脳裏に描くことを本当の目的としており、古文献の追跡はその手段にすぎない、と考えていたのではないだろうか。私の研究室で少しは柳さんに役立ったであろうと推測すれば、『大正名器鑑』（全 11 冊 1926 年）の初版本の「袋」に関する膨大な項目を抽出することぐらいではなかったろうか。

本書は、柳さんの仕事を集大成する作品集である。

柳さんの仕事で指摘しておきたいことがある。今、袋屋の「歴史上の地位」と書いたが、これはとりもなおさず作家としてのアイデンティティの追究にほかならないだろう。自身の仕事を遠く 400 年前の袋屋に想いを馳せるそのロマンに心を動かされる。だからこそか、柳さんの仕事には気品が漂う。一点一点はごく小さい茶入、あるいは茶碗の袋から、布の素材感や施文を超えて惻々として伝わってくる気品に対峙し、静かに鑑賞したい。

（東京芸術大学名誉教授 永青文庫館長）